

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクト I (教員自由企画型) 2016年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部・教授	濁川孝志	印
研究課題名	「里山資本主義」の先進国、オーストリアに学ぶ環境教育系授業プログラムの開発		
研究期間	2016年度		
研究経費	100千円		

【研究の概要】

グローバル経済が末期的な症状を示し、同時に地球環境が劣悪な状況を呈している現在、自然環境保全、地域経済と地域コミュニティの活性化、循環可能な資源活用のシステム作りなどは現代社会における最重要テーマの一つになっている。これらの諸課題を解決する一つのシステムとして考案されたのが、「里山資本主義」である。これは、マネー資本主義の限界に気付き、本物の豊かさとは何かを追求した結果たどり着いた発想と言い換えることもできる。本研究では、このシステムの先進国として紹介されているオーストリア、ラムゾウ地域を訪れ、現地での聞き取り調査からそのシステムを学び、これが成功しているエッセンスについて考察する。この考察を前提に、森林が循環するための樹木の伐採法や、地域経済循環システムの創出などに関するエッセンスを学ぶための学生向けプログラムの可能性について考えるものであった。

今回オーストリアのラムゾウを訪れ、現地で生活する横山久美子氏に同行を願い、現地の状況を視察すると共に「里山資本主義」に関するインタビュー調査を行った。インタビューの視点として、①里山資源の見直し ②森林マイスター制 ③持続可能な森林伐採 ④自然エネルギーと脱原発 ⑤耕作放棄地の有効活用 ⑥グローバル経済の問題点などを取り上げた。インタビューと視察から、オーストリアで行われている地域経済を循環させるサブシステムをそのまま日本に取り入れることが可能かどうかは不明であるが、過疎化が進み日本の里山などでこれを手本として実施することの可能性が示唆された。また、「里山資本主義」という発想は、現在の日本の資本主義を中心とする経済状況に鑑みて考案されたものであるが、そもそもオーストリアには経済を循環させるサブシステムとしての「里山資本主義」という発想は無いことが解った。

学生が「里山資本主義」を学ぶプログラムは、上述のインタビューで取り上げた6つの観点を盛り込んだ講義と、日本で「里山資本主義」的な経済システムが実践されている岡山県真庭市（バイオマス発電）、など広島県庄原市（エコストープ）でのフィールドワークを組み合わせれば可能と考えられる。

この種のプログラムは、日本の将来を担う学生が環境問題や地域コミュニティ活性化の問題を考える良い機会となり、同時にローカルコミュニティの確立を基盤とした真の意味でのグローバリゼーションに目を向ける良いチャンスになると考える。